統合保育

津守　真

四歳のTくんは、幼稚園にゆきながら私の養護学校の幼稚部に通っている。

私共のところにくる日は、朝、遅目にくると、まずロッカーの中にすっぽり入る。まず自分の空間を確保するところから一日を始めようとしているように思える。母に帰れとバイバイと手を振り、母が立ち去るとすぐにロッカーから出てくる。そして弁当の袋を持って食卓机にくる。私がおぼんを出す。Tくんは自分で袋を開き、弁当箱を出し、自分で前かけをかけ、弁当箱の蓋をあけてしばらく眺める。多くの場合、弁当は食べない。ママと言うので、私はママがお弁当作ったんだねと言うと、また蓋をしめてロッカーに置きにゆく。母親が作った弁当は、家庭と園とのつなぎ目であり、子どもの心を外に向けさせる前

の心の拠りどころである。

それからTくんは私の手をひいて二階の階段を上り、途中の段に腰かけて下を見下ろす。この階段は先年赤い絨緞を敷きつめた。何人もの子どもがこの階段を好きで、途中で立止まったり腰をおろしたりする。下の空間と上の空間をつなぐ中間にある階段は、子どもの好きな場所のひとつである。Tくんは何回か上ったり下りたりした後、二階の隅の静かな部屋で私とふざけて笑い合って遊ぶ。ほぼ一時間位こうしてゆっくりと過ごすと、私をおいて部屋から出てゆく。それから後がこの子の世界である。

私は立ち去る子どものあとを追わないことにしているのだが、先日は足どりも達者ではないこの子の姿が一瞬の間に見えなくなり、私は学校中を探し回ったことがあった。そのときは庭にひとりで出て、木の櫓の上で他の大人と遊んでいた。胸を張ってひとりで歩くこの子の姿は、小さいながら堂々として頼もしい。

Tくんの好きな遊びのひとつが、箱積み木を積むことである。大きな箱積み木ひとつずつ抱えて床の上に置く。三個位重ねると次の山をつくる。自分で力を出して運ぶことに成就感を感じているらしい。後半になると力も尽きてくるようなので、私が一個ずつ渡す。こうして全部の積み木を並べると、それなりにこの子の作り出している秩序が見えて面白い。三、四個ずつ重ねられた積み木の山は折れ曲がっていくつかの半分囲まれた空間ができている。殆ど無意識に作られた形であるが、Tくんはその積み木の後ろから顔を出し

て、通りかかる人と笑い合って遊ぶ。とり立てて言うほどのこともないように見える積み木遊びであるが、毎回、三十分位はせっせとこうして遊ぶ。ひとしきり遊ぶと、日によって、大便が一杯出る。ひと仕事やり終えたという感覚があるのだろう。

ある日、迎えに来た母親は、この子の遊んだあとを見て次のようなことを言った。Tくんは幼稚園では積み木をやり始めると、すぐに他の子がやってあげると言って手を出すので、この子は最後までやれない。家では二歳下の妹がきて途中でこわしてしまう。この子は自分が思うように積み木をやれる場がないのですと言う。私は、とりたてて言う程のこともない小さな遊びのひとこまなのだが、その子なりのペースで動く場を確保することが、かならずしも容易ではないこと、そしてこの小さな保育の場こそがどの子どもも欲しているのであることを思った。

Tくんは、朝、服を着がえるのに時間がかかる。自分の好みの下着や洋服を選び、あるきまった手順で自分で着ないと気が済まない。その手順がうまくいかないと大泣きする。幼稚園は九時までに登園することになっているので、母親はTくんのゆっくりしたペースに付き合っていると時間に間に合わない。子どものことがよく分かっているこの母親にとっては、朝は葛藤の時間であるという。私も、幼稚園はどうして朝の登園時間をそんなにきつくきめなければいけないのかと疑問に思う。家庭と幼稚園とはもっと滑らかに移行

する方法を工夫する必要がある。子どもにとり、自分が納得して生活を進めることが、生活全体を安定させ、またそれから先に進む子どもの意欲をつくる。ことに障害をもつ子どもは、夜の眠りの浅い日もあるし、身体条件の良くない日も多いだろう。園の側で、朝の時間を子どもに合わせてゆとりをつくることによって親子ともに生活しやすくなると思う。

Tくんは一日の前半を大人とゆっくりと過ごすと、そのあとは自分で活動するのだが、日によっては、この子が一日大人の傍から離れないことがある。それは幼稚園の運動会や遊戯会の時期である。比較的ゆるやかな日課のTくんの幼稚園でも、行事のころは子どもたちが自分のペースで生活できないようである。先生も皆を一緒に行事に参加させることに気を奪われて、子どもの生活の他の面が見えなくなるらしい。行事への参加の仕方は園によっていろいろだから一概には言えないが、秋の運動会とクリスマスの遊戯会の頃には、障害をもつ子どもには緊張がつづく日が多い。とくに練習のときが問題である。本番の日はむしろ祝祭の賑わいがあって、どの子もたのしめる。このことは障害の子どもに極端にあらわれるが、どの子どもにもある程度共通のことである。私のところに来ているいろいろの子どもたちを見ていて、考えさせられることのひとつである。

とくに統合保育で根本のことは、どの子どももあるがままでよいと思ってつき合うことである。もっとましな人間になってほしいという期待が大人の心に少しでもあると、子どもはそれを肌で分かってしまう。そのままで立派に園の一員だと周囲の人も自分も思えるところから統合保育ははじまるのだと思う。

（愛育養護学校）